こんなんしてます。

わだいのしごと

109

「谷」を生かすフードバレー

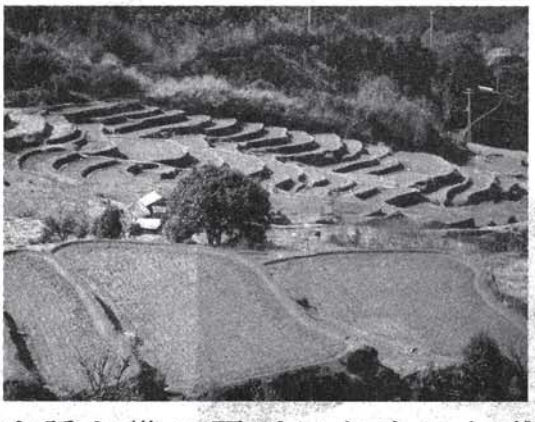
産業のメッカ

霞ケ関でのある委員会に出席しました。筆者が関わる産学連携の分野では、国の科学技術計画に沿って、その時々のキーワードが出ます。その一つが「バレー」。Valley＝谷という言葉です。

産学連携とは、大学の研究と産業界が連携して新事業を生み出し社会発展に寄与しようというもの。2000年当時の日本では「シリコンバレー」が産学連携のお手本でした。シリコンバレーとはアメリカ西海岸のサンフランシスコ湾岸に細長く広がる一帯のことで、元々はプルーンなどの果樹園が広がるエリアでした。ここにヒューレット・パッカード、インテル、アップル、グーグルなど世界的な企業をはじめ、半導体、IT（情報技術）、コンピューター関連企業など1万2000社や複数の大学が集積。新事業や起業家をどんどん生み出す産学連携のモデルとなっています。

そして今回、日本の農業が見習う方法とされたのが、オランダの「フードバレー」です。オランダは九州と同じくらいの国土面積ですが、農業輸出額は日本の約30倍で世界第2位の農産物輸出大国。ワーヘニンゲン大学を中心に1500以上の研究機関や企業が集積し、農家の生産から加工、サービスまでの戦略的な一環体制で国際力強化を展開。農家収入も増え、植物を活用した自然エネルギーの開発など、経済と環境と社会の持続を目的とした多様な取り組みを行っています。

2つの事例から、バレー＝谷とは集積の利、と理解できます。バレーでは、大学の基礎研究、企業の技術開発、企業集積による異分野との連携、起業家を生む挑戦的、投資的な土壌などが好循環を形成し、世界の産業をけん引するメッカとなっているのです。



天空の棚田（那智勝浦町色川）

谷を越える方法

「死の谷」という言葉もあります。研究開発の成果を製品化できず、深い谷底に死なせてしまう状況をいいます。死の谷を越えるには、ケタ違いに大きい投資や新たなパートナーが必要だからです。こうした産学連携の話は、経済と産業の成長神話の道といえます。経済と産業は常に成長することで幸福をもたらすという道です。

死の谷の越え方には、もう一つの道があります。日本の農業の重点方向とされるフードバレー方式ですが、現実の多くの農業農村では「深い谷」を面前にして戸惑っています。日本は平地が少なく耕地面積の4割が傾斜の多い中山間地のため、オランダのような農地の集約化には限界があります。山肌に、天空に広がるほどの棚田や段々畑を切り開き、古来、人間の知恵と肉体労働に頼りながら農業を営んできました。

谷間の棚田は技術の宝庫です。水の循環を緻密に計算した知恵と労働の結晶です。経済と生活と環境の持続には見直したいバレーです。このバレーに広がる資産を過去の遺物としてではなく、アグリフードのヒトと技術が集積するメッカにできないだろうか。ICT（情報通信技術）や自然エネルギー、土木、育苗、生産者、消費者、金融などが集まる小さなメッカがあちこちにできないものか。放棄されつつある土地の本来の力を生かした発展の方向性は未来への投資として魅力的なはず。日本の風土では、小さなメッカの集積が「死の谷」を越えるもう一つの方法論ではないか…産業創出を議論する霞ケ関の会議場で、そんなことを考えていました。

伝統的梅生産。一方で高機能性ウメ品種開発も行われている

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。